



これはある小学校の入試問題です。四つの中から一つだけ「仲間はずれ」を探させる問題になっています。一番と三番はともかく、二番や四番の問題は大人でさえ答えに困ってしまうのではないのでしょうか。

このような「分類」というものは、大人が考える知的なものですから、そういう教育を受けない限りはだいたい未発達です。この問題は要するにものを考える力を試しているわけです。仲間はずれのものを分類する力もひとつの能力ですから、どこかで養わなければいけません。

しかしこんな力を、小学校にも入っていない子どもの入学試験として使うのはどうでしょうか。この時期までにそういう能力を身につけておかなければならないかどうかと言えば、それはまったく不必要と断言していいでしょう。こういう能力はもっと後になって、自然にそういう場面にぶつかって身につけていくものなのです。こんなことをわざわざ絵によって考えさせる必要はないのです。

テストというのは落とすためにやっていますから、このようなテスト問題が実に多くなっています。これは練習をすれば簡単にできますが、練習しない子どもにとっては時間がかかることなので差が出ます。ということもまったく無意味だとは言いませんし、遊びとして子どもがやっているのならいいのですが、試験問題として夢中になってやるというのはおかしなことだと思います。

知能テストというのは、練習しないものについて、それを解決するのにどれだけ時間がかかったかで測るものです。このような問題で知能を測定することは、結果があやまって出てしまう場合もあります。

こういう問題が入試問題になると、たしかに練習を積んだ子どもはいい点が取れるでしょう。しかし、それがその子どもの本当の能力を測定したことはないのです。

ところが、合格点を取らなければ入学できないわけですから、その目的には合っていると云わざるを得ないでしょう。何もしないよりはプラスになります。頭を使うことはすべてプラスになることですから。しかし、このような問題で頭を使うよりも、もっともって実際の生活の中で頭を使うようにしたほうが賢明です。